

日本人のこころを読み直す —「恥」と「罪」の意識構造— （その二 「恥」と「罪」の全体構造）

橋 本 雅 之

第一章 「恥」と「罪」の全体構造

（一）

日本が連合国のポツダム宣言を受諾して無条件降伏した翌年の昭和 21 (1946) 年に、R・ベネディクトの『菊と刀』が出版された。日本を訪れたことのない、アメリカの文化人類学者が著したこの本が、その後の日本文化論・日本人論に大きな影響を与えたことはよく知られている。その中心となるのが、いわゆる「恥の文化」論である。彼女は同書第十章の「徳のジレンマ」において次のように述べている。^(注1)

慎重と自重とを全く同一視するという事の中には、他人の行動の中に看取されるあらゆる暗示に油断なく心を配ること、および他人が自分の行動を批判するということを強く意識することが含まれている。彼ら(橋本注、日本人のこと)は、「世間がうるさいから自重せねばならない」とか、「もし世間というものがなければ、自重しなくともよいのだが」などと言う。こういう表現は自重が外面的強制力にもとづくことを述べた、極端な言い方である。正しい行動の内面的強制力を全然考慮の中に置いていない表現である。(中略)右の極端な表現は、日本人がおよそどういうところに重点を置いているかということを正しく指摘している。すなわち、日本人は罪の重大さよりも恥の重大さに重きを置いているのである。

さまざまな文化の人類学的研究において重要なことは、恥を基調とする文

化と、罪を基調とする文化とを区別することである。道德の絶対的標準を説き、良心の啓発を頼みとする社会は、罪の文化 'guilt culture' と定義することができる。(中略) 恥の文化 'shame culture' には、人間に対してはもとより、神に対してさえも告白するという習慣はない。幸運を祈願する儀式はあるが、贖罪の儀式はない。

真の罪の文化が内面的な罪の自覚にもとづいて善行を行うのに対して、真の恥の文化は外面的強制力にもとづいて善行を行なう。

自分が属している文化の本質を冷静に自覚することの難しさは、日本のみならず世界のあらゆる国についていえることであろう。外部からの視点によってはじめて映し出された自己の姿に直面したとき、人は驚き戸惑う。

ベネディクトが、日本人の行動規範として「恥」の意識を浮かび上がらせ、そこに日本文化の価値観があると指摘したことは、日本人の深層意識の核心を突くまさに衝撃的な考察であったといえるだろう。そしてそれが、敗戦直後の日本社会において、アジア諸国に大きな被害と苦痛を与えた戦争責任の問題とも相俟って、日本人と日本文化の病根であるかのように受け取られたのもやむを得なかったといえるだろう。

ベネディクトが「日本人は罪の重大さよりも恥の重大さに重きを置いている」あるいは「真の罪の文化が内面的な罪の自覚にもとづいて善行を行うのに対して、真の恥の文化は外面的強制力にもとづいて善行を行なう」と述べていることについて、それに反発する感情的な反論をしばしば耳にすることはあるが、それを冷静に分析してベネディクトの日本文化論を批判的に論じたものは意外に少ないように思われる。そのような中であって、柳田国男の「罪の文化と恥の文化」は、^(注2) その数少ないすぐれた批判のひとつであると言えるだろう。

柳田はその論文において、自身の「民俗学」の立場から「民族学」の方法的欠点を指摘し、「民族学」が他国の文化を記述するに当たって用いる資料には往々にして偏りがあること、そしてその結果として内容分析に誤解もしくは誤謬が生じる危うさがあることを指摘した上で、

日本人の大多数の者ほど「罪」といふ言葉を朝夕口にして居た民族は西洋

の基督教国にも少なかったらう。（中略）神道の罪は祓ひと贖ひとによって、この世ながらに浄め消すことが出来た。（中略）恥を意味する日本語の存在は、是も上古の記録まで溯り得られるが、其用ゐる所が少しばかり、近頃のものとはちがつて居て、その原始形ともいふべきものは、幾分か肉体的であつたやうな気がする。之を顕はせば人が笑ふという点までは同じでも、隠し蔽へばそれだけでもう恥は無くすすみ、外から指摘したり暴露したりするやうな「恥」は、もとは存在しなかつたやうに思ふがどうであらうか。（中略）日本で「恥」と言つたのは笑はれることであつた。

と述べ、日本文化における「恥」のあり方に関するベネディクトの調査と分析に片寄りがあることを論じた。

日本文化における「恥」について、その原始形を「肉体的」として捉え、さらに「日本で「恥」と言つたのは笑はれることであつた」と述べる柳田論の妥当性は、本研究（その一）「序章『竹取物語』の証言」において、導入的に提示した次のような私見、^(注3)

『竹取物語』が語るところによれば、「恥」意識は、何よりもまず「視覚」的に確認することができる具体的な実体を伴った事柄から生じた負的な心のあり方であつたと推察できる。隠しておくべき「お尻」を公衆の面前で晒してやるという暴言を吐く竹取の翁は、その貴重な証言者である。

からも確認できるだろう。

公衆の面前で「お尻を晒」すことによって他人から「笑われ」、その結果として月の使者が感じるであろう「恥」とは、一見すればベネディクトが言うように、「外面的強制力」に拘泥することによって日本人が感じる「恥」の典型であるように考えられるかもしれない。

しかしながら、注意深く観察するならば、その「恥」意識は、心理的にはあくまで当事者によって主体的に感じとられ内発的に発生してくるものであつて、「お前は恥ずかしい人間だ」というような「外面的強制力」によつてもたらされるのではない。したがって、ベネディクトがいうような「外面的強制力」は、あくまでもきっかけであつてその本質ではないと言わねばならない。

ベネディクトが、日本文化の「恥」を論じたことは、日本文化研究において

重要な意味があり、その研究成果は十分に尊重されねばならない。しかしながら、その考察を全体として評価するならば、彼女の研究は日本文化における「恥」の部分的な指摘に留まっている。その意味において『菊と刀』における日本文化論、日本人論は、不完全であってある種の誤解を含むと言わざるを得ないだろう。では、その誤解は何に由来するのであろうか。それについても柳田国男が指摘している通り、ベネディクトは日本文化における「罪」と「罪悪感」の問題を見落としているのであり、ここに彼女の研究の欠陥が認められる。

しかしこれは、何もベネディクトに限ったことではない。実は、日本文化研究において「罪」や「罪悪感」はあまり問題として意識されてこなかったのである。しかしながら、日本人の「恥」の問題と寄り添うようにして「罪悪感」の問題は見え隠れしている。^(注4)そしてそれを見逃してきたところに、従来の日本人論や日本文化論の欠陥がある。日本文化における「恥」を問題とするならば、その深層意識において深い関わりがある「罪悪感」の問題を構造的に把握して分析しなければならない。その視点からの分析が欠如したベネディクトの日本人論は、結局のところ正鵠を射たものとなっていないと思うのである。

(二)

「恥」と「罪」という、一見無関係とも思える二つの心理の間に深い構造的関係があるとすれば、そこには両者を橋渡しする何か重要な別の要素が存在すると考えられる。

民俗学者赤坂憲雄の論考「穢れの精神史」は、日本における習俗としての「穢れ」の観念の変遷をたどり、それが古代から中世にかけて社会制度の中に組み込まれていく過程を論じたものである。^(注5)これは、本論が目指す方向とは異なっているが、そこにおいて提示された穢れ観念の基本的なモデル「罪＝穢れ」と「死＝穢れ」は、日本文化における「罪」のみならず「恥」の深層意識を考える上で、「穢れ」の観念が重要な意味を持つことを示唆している。そして、その「穢れ」が「罪悪感」と深く関係していることについては、日本神話に着目した北山修に次のような注目すべき発言がある。^(注6)

神話の描写では、「この国」や神々を生んで死んだイザナミに対し、父神イザナキが意識的に感じたのは彼女の死体が「汚い」「醜い」という嫌悪感で

あり、その後「汚さ」はケガレとなって父神のみそぎを動機づけた。みそぎはなかなかすまないものをすませようとする試みであり、ケガレとは「すまなもの」である。つまり、それは物質的なものとして扱われているが、「すまない」という心的な苦痛が処理されているのである。

これは精神分析学からみた「罪悪感」の心理的発生論であり、日本文化において「罪悪感」がどのように生まれ、そしてそれが心理的にどのように処理されるのかということが問題とされている。

ここで北山は、見るなの禁止を破った結果として急激な幻滅を体験したイザナキの心の中に生じた、愛するイザナミが同時に嫌悪すべき対象であるというアンヴィバレンスによって、禁を破った自分自身に心理的「罪悪感」が発生するのだとし、自らが直面したその「罪悪感」が、物質的な「ケガレ」として扱われ、それが「みそぎ」によって処理される心理のプロセスを指摘しているのである。これは、日本文化の深層を考える上で、まさに画期的な考察であると言わねばならない。

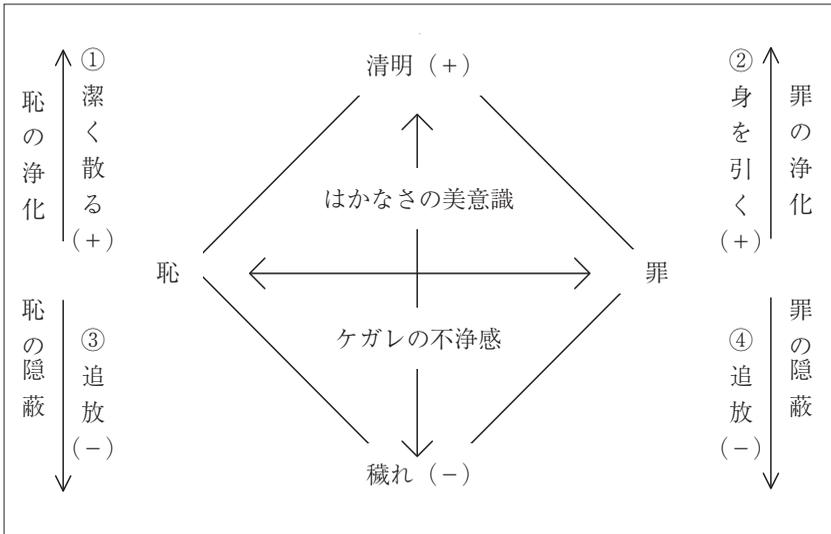
ここには、日本人が「罪」をどのように捉え、そしてどのように処理してきたのかという道筋をはっきりと示されている。それを、私なりの解釈で言うならば、日本人は自らの「罪悪感」を禊ぎによって清め、「罪」を「水に流す」ことを、心理的で現実的な問題解決の方法としてきたのであり、それは日本における重要な価値観ともなっているのである。これは、問題が日本文化の枠内に留まっている限りにおいては共同体や社会の心理的安定を保つための有効に機能してきたといえる。

しかし一方で、対外的な難問に直面したとき、この「罪」を「水に流す」という日本的価値観は、他の文化においては「無責任」として厳しい批判に晒されることになる。たとえば、一見政治的問題にみえる、いわゆる「戦争責任」問題の本質は、実はこのような日本的価値観と日本文化の深層構造にあると言わねばならない。日本と中国や韓国との間で、今も軋轢を生んでいる戦争責任問題は、政治的問題である以前に文化的価値観の相違に基づく対立なのである。したがってその根は極めて深くまた深刻である。

「戦争責任」の問題を乗り越えていくためには、まず日本人自身が、日本の

深層文化とその価値観の本質をしっかりと自覚する必要がある。そして、その自覚に基づいて、自らの価値観を説明し、それを活かしながらも乗り越えていく覚悟を持たねばならない。日本人のこころを読み直すという本論は、このような自覚の下に生まれてきたのである。

さて、心理的にみて「穢れ」が「罪悪感」と深い関係にあり、それを「みそぎ」によって清めるという構造から、我々は「穢れ」の対概念として、神話にも登場する「清き明かき」心を取り出すことができる。そして、この「清明」を視野に入れることによって日本文化における「恥」と「罪」の全体構造が見えてくる。そしてそれを図示すれば、以下のような関係として把握できるものと思われる。



このような構造的関係性は、日本文化の核心ともいえる深層意識そのものである。ここに4点に整理した、

- ①「潔く散る (+)」
- ②「身を引く (+)」
- ③「追放 (-)」
- ④「追放 (-)」

の具体的あり方を、神話をはじめとする残された伝承や文学作品、さらにさまざまな言説から検証することが、次の課題である。

（続く）

注

- 1 R・ベネディクト『菊と刀』（長谷川松治訳、社会思想社・定訳版、1948（昭和23）年）
- 2 『定本 柳田國男集』第三十卷（筑摩書房刊、1970（昭和45）年11月）所収、初出原題の「尋常人の人世観」を改題）
- 3 拙稿「日本人のこころを読み直す—「恥」と「罪」の意識構造—（その1）」（『日本学論叢』第1号、2011（平成23）年3月）
- 4 北山修・橋本雅之『日本人の〈原罪〉』（講談社現代新書、2009（平成21）年1月）
- 5 赤坂憲雄「穢れの精神史」（『岩波講座・東洋思想』第16巻所収、1989（平成元）年3月）
- 6 注4前掲書、第一章「愛する者を「害する」こと」五二頁